

地域社会における女性のエンパワーメント ——鶴ヶ島市ひまわり会の実践記録から——

中野波津巳

＜ キーワード ＞

地域社会、女性、エンパワーメント、鶴ヶ島市、ひまわり会

＜ 要 旨 ＞

1999年に男女共同参画社会基本法が施行され、男女共同参画を推進する動きが一気に加速すると思ったのも束の間、多くの自治体で男女共同参画推進条例の制定にクレームがつくなど、昨年頃からバックラッシュの動きが勢いを増している。また、男女平等を目指した法的整備が進んでも、人々の意識の中には依然としてジェンダーによる固定観念が根強く残っている。こうした状況の中で男女共同参画を着実に推進していくには、女性のエンパワーメントこそが重要な意味を持つと考える。

本稿では、女性のエンパワーメントが社会を変える原動力となった事例として、鶴ヶ島市ひまわり会（以下「ひまわり会」と記述）の16年間の足跡を追う。埼玉県鶴ヶ島市で農業を生業とする女性たちのグループ「ひまわり会」は、1988年9月に会を結成して以来16年間にわたり、家族や地域にさまざまな影響を与えながら活動を続けてきた。農家の嫁としての苦労や悩みを打ち明け合うことから次第に関心を広げ、生産者と消費者との交流イベントに取り組んだり、審議会などの委員として公の場で発言の機会を得るなど活動の幅を着実に広げてきた。最近では、女性農業者の地位の確立や農業後継者を育てることを目指す「家族経営協定」の締結にも積極的に取り組んでいる。

こうした「ひまわり会」のエンパワーメントの過程を踏まえた上で、「ひまわり会」と行政とのかわり合いを検証しながら、女性のエンパワーメントのために行政が果たすべき役割について考察する。

1. はじめに

1999年6月、女子差別撤廃条約に基づいて男女共同参画社会基本法が施行され、男女共同参画を推進する動きが一気に加速すると思ったのも束の間、多くの自治体で男女共同参画推進条例の制定にクレームがつくなど、昨年頃からバックラッシュの動きが勢いを増している。また、男女平等を目指した法的整備が進んでも、人々の意識の中には依然としてジェンダーによる固定観念が根強く残っている。こうした状況の中で男女共同参画を着実に推進していくには、女性のエンパワーメント¹⁾が重要であり、女性のエンパワーメン

トこそが社会を変える原動力になると考える。

女性のエンパワーメントが社会を変える原動力となった事例として、鶴ヶ島市ひまわり会（以下「ひまわり会」と記述）の16年間の足跡を追う。「ひまわり会」は、埼玉県鶴ヶ島市で農業に携わる女性たちが結成したグループであるが、地域社会における女性のエンパワーメントの具体的な形として、多くの示唆を与えてくれる。

本稿は、行政職員の立場で「ひまわり会」の設立時に事務局として関わり、その後も一支援者として活動を見守ってきた筆者が、女性学の視点から会の存在と



活動の意義をとらえ直すとともに、今後、男女共同参画を推進していくために、行政が果たすべき役割を探ろうとするものである。

2. 「ひまわり会」のエンパワーメントのプロセス

「ひまわり会」は、1988年9月に誕生以来16年にわたり、家族や地域にさまざまな影響を与えながら活動してきた。関係者へのインタビュー²⁾、会の機関誌『ひまわり通信』、ひまわり会結成10周年記念誌『ひまわりのように』などから、その足跡を振り返る。

(1) 会の誕生

鶴ヶ島市は、埼玉県の西部に位置する人口約6万8千人（2005年4月現在）のまちである。池袋から東武東上線で40分という位置にあることから、東京都内に通勤する人のベッドタウンとして人口が増えてきた。

「ひまわり会」が結成された当時は、集合住宅の建設が相次ぎ、人口は爆発的に増加、都市化が急速に進展していた。鶴ヶ島の農業は一変し、農家数も耕地面積も減少していく中、専業農家の若い30代から40代の女性で、鶴ヶ島の農業を支えていく人、女性の地域リーダーになっていく人の組織化を目指して、埼玉県飯能農業改良普及所³⁾の毛須英子生活改良普及員⁴⁾が戸別訪問を始めたのが誕生のきっかけだった。初代会長となった岡野とし子のグループをつくりたいという思いと熱心な働きかけにより、「ひまわり会」はスタートした。当時の様子を岡野は次のように語っている。

「みんな畑と家の往復だけで、このまま年とってしまふのかと思っていました。普及所の呼びかけがあったとき、だれかが動き出さないとできないと思いました。同じ思いの人がいたから生まれたんだと思います。」

[インタビュー 2004.4.10]

ひまわりのようにいつも明るく元気に太陽に向かってまっすぐに伸びていこうということから、「ひまわり会」の名前が決まった。翌年の1989年8月には、岡野の発案で会の機関誌『ひまわり通信』を創刊、岡野を中心に編集にあたり、現在45号まで発行されている。『ひまわり通信』は、異なる地域から鶴ヶ島に嫁いできた会員をつなぐ役目を果たしてきたが、今では会の歩みをたどる貴重な資料となっている。



『ひまわり通信』の一部。
会の歩みをたどる貴重な資料となっている。

(2) 活動の広がり

会員の経営は、野菜、果樹、花、お茶、酪農、養鶏とそれぞれに違っていましたが、毛須普及員が食生活や家計簿記帳など、共通する内容から活動を方向づけた。当時の様子を毛須は次のように話している。

「最初は、農家共通の課題に関する集まりを持つようにしました。多世代家族の中での悩み、農業独特の問題、例えば食事やお金のことなどです。サラリーマンの家族だったら女性が財布を握ることが多いけれど、農家の場合、親が全部持っていて、生活費も決まっていなくて、子どもの物を買うときも気兼ねしながら小遣いをもらっていた人が多かったんです。結婚するときに持ってきた自分の貯金を取り崩していたという話も聞きました。」

[インタビュー 2004.4.26]

最初は、農家の嫁としての苦労や悩みを打ち明け合うことが多かった。自分の悩みを話す人もなく、長年胸の中にため込んできた思いが、会の中で一気に吐き出されたのである。当時のことを会員は次のように振り返っている。

「それまではグチをこぼせる場所がなかったけど、ここでは遠慮なく言えたんです。みんなが同じだったから。」
「でも一年ほどしたら、膿が出つくしてしまっただけでなく、ここにくと、ああ、私もこんなふうになっちゃって解決法が浮かんでくるし、みんなの励ま



しもある。少しぐらいのことで負けないぞって思えるようになってきたんです。」

『ベジタ』1993 88-89]

その後の「ひまわり会」のパワーには目を見張るものがあった。会員同士の共感をとおして自分たちの中に眠っていた力に気づいたとき、それは爆発的な行動のエネルギーとなった。農業に関する勉強や情報交換だけでなく、地域でのボランティア、他市町村の農業女性との交流会など、地域や社会に目を向け、自分たちの可能性を広げていったのである。

1988年にオープンしたばかりの鶴ヶ島市働く婦人の家「ハーモニー」⁵⁾が、「ひまわり会」の活動拠点となっていたこともあり、働く婦人の家の職員は、新鮮な野菜をつくる生産者と、それがほしいという消費者をうまくつなぐことはできないかと考えていた。1989年7月には、生産者と消費者の交流イベント「いきいき野菜まつり」が実現した。「ひまわり会」は自分たちがつくった新鮮な野菜を販売することで地元の農業を紹介、消費者グループは「ひまわり会」の新鮮な野菜を使ってかぼちゃケーキ、人参ゼリーなどをつくって試食品として提供した。生産者と消費者の女性たちが手を組んで作り上げたイベントには、予想を超える人が集まった。参加した団体の代表者で構成する実行委員会の反省会では、「生産者と消費者の交流の時間が少なかった」、「年に1回のイベントだけでなく、郷土料理教室や農作業体験など交流の場を広げていきたい」⁶⁾という声があり、今後の生産者と消費者の交流の広がりを予想させるスタートとなった。

「いきいき野菜まつり」で自分たちがつくった農産物の即売をした会員は、「わずか15名の会員で、花、野菜、卵、お茶、牛乳など、あれだけのものを集められるなんてすごいね」⁷⁾という感想をもらした。一人で黙々と生産しているときには気づかなかったことが見えてくることによって、鶴ヶ島の食と農業を支えているという自信が会員の中に芽生えていったのである。

1回目の「いきいき野菜まつり」で消費者との交流に手応えを感じ、都市化の中での農業に可能性を見いだそうとしていた「ひまわり会」は、「生産者の顔がわかって、どこに行けば農産物が買えるのかわかるものがほしい」という消費者の声を受けて、「つるがしまいきいき直売マップ」をつくることになった。表面

には鶴ヶ島の地図に会員の家を書き込み、裏面には会員の似顔絵とメッセージを載せた。

1990年の「第2回いきいき野菜まつり」では、生産者と消費者の交流に重点を置いたパネルディスカッションが行われ、「ひまわり会」からは高橋シズカがパネリストとして参加した。「ひまわり会」が生産者として加わることによって、生産者（＝男性）と消費者（＝女性）という従来の関係に変化をもたらした。男性の生産者には、見た目がよく規格のそろった、市場で評価される野菜の生産を重視する人が多かったのに対し、「ひまわり会」の会員たちは、消費者が求める安全で安心な野菜について、自ら家族の食事づくりにも携わる生産者として共感し合える部分が大きかった。その年の秋には、「いきいき野菜まつり」での交流が消費者の農家訪問へと発展、露地野菜を生産している田中京子とハウス栽培が中心の高橋シズカの畑への訪問が実現したのである。

「いきいき野菜まつり」を通して地域への関心をさらに広げたひまわり会は、会の事業として、花を種から育て公共施設に配る「花いっぱい活動」に取り組むようになった。1990年に市役所など公共施設11カ所への配布から始まったこの活動は、配布先が31カ所に増え、現在も続いている。夏から秋はサルビアやマリーゴールドが、冬から春はパンジーが多くの人々の目を楽しませてくれる。この活動の様子は、新聞各紙でも報道された。最初はボランティアで始めたが、範囲が広がるにつれ鶴ヶ島市から補助金が出るようになり、種子代や植え替えに使うビニールポットなどの必要経費はまかなえるようになった。

しかし、種をまいてハウスの中で温度管理をし、少し大きくなった数千本にも及ぶ苗を1本ずつビニールポットに植え替え、さらに温度管理をしながら育て、大きくなった苗をトラックに積んで公共施設に配る一連の作業は、すべて会員の善意で行われている。

(3) 新しいことへの挑戦

農業という共通の仕事を持つ仲間を得たことで、農業にも自分にも自信が持てるようになった会員は、次々と新しいことに挑戦していった。

鶴ヶ島市には埼玉県農業大学校⁸⁾があり、一般農業者を対象に実施している農業機械技能者養成研修の一環として、年に数回トラクター運転研修を開講している。農業大学校内の運転コースを利用して5日間の講



習を受け、実技試験に合格すると大型特殊免許（農耕車限定）の免許が取得できるというものである。実技試験は、埼玉県鴻巣市にある免許センターの試験官が出張して行われるため、免許センターまで行かなくてすむ上、講習料は無料、かかる費用は実技試験受験手数料の3300円だけである。当時は女性だけを対象とした研修期間が設定されていたので、参加しやすかったようである。1990年には岸田喜世子、中島八枝子、長谷川幸子、1997年には比留間由美子、高田美知子、清水誠子とトラクター運転研修への挑戦は広がりを見せた。

以下は、トラクター運転研修に参加した会員の感想である。

「一度自分も運転してみたい気持ちがありました。女性には無理な仕事だとあきらめていました。次第に機械にも慣れ、運転コースを走り終えた時の気分は爽快でした。免許を手にした喜び、大勢の友ができた喜びも大きく、自分も一回り大きくなった気がします。」（中島八枝子）

「女性だけのトラクター運転研修があるというので思い切って参加しました。初めて乗車した時は動いただけで感激しましたが、コースの中を自由に走り回れるようになると、自信に満ちてきました。」（長谷川幸子）

『ひまわり通信』第7号 1990]

大きなトラクターを自由に操作できるようになり、大型特殊免許を手にすることができた体験から、自信を深めていった様子がよくわかる。

挑戦はさらに広がり、1992年9月には、比留間由美子が埼玉県農業青年海外派遣研修に参加、ヨーロッパ視察（ドイツ、オランダ、フランス）に出かけた。比留間は、シクラメンを中心に鉢物を栽培し庭先で販売していたが、生活に花をふんだんに取り入れるような販売の仕方を工夫したいという夢を持っていた。比留間が「ヨーロッパ研修に参加させていただいたのも、「ひまわり会」の一員だったからこそで、会がなかったら「農家の嫁」にあのチャンスは二度と来なかったにちがいない」『ひまわりのように』1998 27]とやっているように、共感し合える仲間を得ることで、潜在的な力を発揮していったのである。会員同士が高め合い励まし合うことにより、一人ひとりが可能性を開花させていく過程は、グループの力を証明し続けた。

比留間は帰国後、ドイツの農家と日本の農家の生活

を比較して次のように述べている。

「1日の労働時間は4時間くらいで、残りの時間は家族や自分のために使うのだと聞き、そのゆとりを素晴らしいと思いました。（中略）私はこの研修で、農家で生活する女性として、何が大切なことなのか、よく働くねえという言葉が本当にほめ言葉なのか、もう一度考えてみることにしました。」 [『ひまわり通信』第9号 1991]

比留間は、生活を楽しむゆとりのない日本の農家の暮らしに疑問を投げかけたのである。「ひまわり会」ができて間もないころ、比留間は、「朝起きてから夜寝るまでの間で、私が座れるのはトイレの中だけ」と言っていた。その言葉からは、育児、家事、農作業に追われていた農家の女性の日常が伝わってくる。

(4) 活動に対する評価

消費者との交流から生まれた「いきいき野菜まつり」への取り組みや個々の家の暮らしの改善だけでなく、鶴ヶ島を美しいまちにしていこうという「花いっぱい運動」の広がりなど、消費者とともに鶴ヶ島の農業を発展させていこうとする「ひまわり会」の活動は高く評価され、1993年には、「全国婦人、高齢者によるグループの生活、生産に関する表彰」で農林水産大臣賞を受賞した。1997年には、埼玉県コミュニティ協議会のシラコバト賞に続いて、埼玉県農協福祉事業団の農村地域文化賞特別賞を受賞、「ひまわり会」への注目はますます高まっていった。

会の活動が評価されただけでなく、会員個人の取り組みもさまざまな評価を受けた。1991年3月には、比留間がヨーロッパ研修の内容や農休日をつくった自らの体験をまとめた論文「農業生活にゆとりと楽しさを生み出して」が「農山村婦人の日記念式典」で優秀賞に、1999年1月には、岡野が21世紀の地域農業のあり方についてまとめた論文「明日に輝いて」が「農山村女性の集い」で優秀賞に輝いた。

(5) 農業女性や消費者との交流

「ひまわり会」は、発足当初から埼玉県内各地域の女性農業者の会と交流を重ねてきたが、農林水産大臣賞の受賞で全国的に注目されるようになり、交流は全国へと広がっていった。茨城、栃木、静岡、新潟、北海道など、訪問されたり訪問したり、日本各地で農業を営む女性たちとの交流を深めてきた。また、マスコ



ミからの取材も相次ぎ、テレビやラジオ、雑誌などに登場することも多くなり、「ひまわり会」の名は広く知れわたったのである。その様子を平野仁子は、「その後（農林水産大臣賞受賞後）は、いろいろな方面からの交流会の申し込みがあったり、取材があったりと急に忙しくなり、改めて賞の大きさに驚きました」[『ひまわりのように』1998 26]と言っている。

また、「ひまわり会」は消費者との交流を大切にするため、「いきいき野菜まつり」のほか、市内各地域にある公民館のまつりや産業まつりなどにも積極的に参加し、農業のピーアールに努めてきた。農産物を販売するだけでなく、野菜や花のつくり方教室を開いたり、畑で子どもたちに収穫の喜びを教えたり、みそ、まんじゅう、漬け物などの加工食品のつくり方教室を開いたり、会員一人ひとりの特技を生かした活動は地域に根づき、鶴ヶ島で「ひまわり会」の名を知らない人はいないほどになった。花づくり、野菜づくり、みそづくり、まんじゅうづくりなど、分野によってだれもがリーダーになれる知識や技術を持つ一人ひとりの会員が「ひまわり会」として結集したときには、さらに強い力を発揮する。

(6) 政策決定の場への参加

「ひまわり会」の認知度が高まることで、会員は、地域で発言する場にも参加するようになっていった。それまで女性の委員がいなかった農政推進審議会⁷⁾などで発言する機会を得たことは、女性が政策決定の場に参加するという意味で大変重要なことであった。会員たちは、農政推進審議会や農業交流センター運営委員会、ふるさとの郷構想策定委員会といった農業関係のみならず、女性センター運営委員会、男女共同参画プラン策定委員会、行政改革審議会、特別職報酬審議会、道路愛称選定委員会などにも参加し、発言の機会を得ている。

特定の会員だけが委員になるのではなく、いろいろな会員が委員として活躍している。岡野が、「審議会とかいやだと言う人もいるけれど、『ひまわり会』の看板をしょっているということが自信になって、できてしまうのはすごいと思います」[インタビュー 2004.4.10]と話しているように、会への帰属意識が個人の自信を高めることにもなっているのである。また、岡野は次のようにも言っている。

「いろいろな審議会委員や運営委員になり、肩書

きを得て発言する機会を持つようになったことも、私たちにとっては大きな自信になりました。農業をしている人たちの中でも特に女性は、そういう場に出ていくことがなかったから。」

[インタビュー 2004.4.10]

人は与えられた環境の中で力を発揮していくということを証明した発言である。女性たちができないと思われてきたことは、実は、機会が与えられていなかっただけなのである。

(7) 女性の多重役割の問題

「ひまわり会」の活動に参加するようになって、会員は農家の「嫁」としての役割から解放されたわけではなかった。そのことは、1989年8月に行われた初めての日帰り視察研修の様子から推察できる。研修でたった1日家を空けるのに、会員は「昨日のうちに2日分の仕事をしてきた」、「朝早く起きてお昼ごはんの用意までしてきた」[『ひまわり通信』創刊号 1989]と話していたのである。

母、妻、嫁としての役目を果たしながら生業としての農業に従事し、審議会などの委員として地域で政策決定の場にも参加、消費者との交流を通じて農業をピーアールするという生活に、さらに夫の両親の介護を抱える会員が多くなった。多くの役割が彼女たちの肩にかかり、負担は大きくなった。介護を経験した者が利用できる、社会資源やサービスについてアドバイスしたり、会の事業として会員のための介護講習会を開いたりしながら、それぞれに介護と向き合ってきた。介護保険制度ができた現在でも、高齢者の中には家庭にホームヘルパーなどの他人が入ることを拒み、家族だけの介護を望む者が多いという現実がある。家庭の中で女性が担う役割の多さには疑問を感じずにはられない。

2002年3月、会員の一人である高橋シズカが突然亡くなった。58歳というあまりにも早すぎる死に、会員をはじめ多くの人がショックを受けた。山形県出身の高橋は、20歳で結婚して鶴ヶ島へやってきた。ふるさとを離れ、知っている人のいない土地で、家と畑の往復だけの生活、そんな中での「ひまわり会」との出会いを次のように述べている。

「私は20歳そこそこで東北から嫁にきて、もう30年になりますけどね。この会ができるまでの25、26年はずっと家の中でコツコツやってきた



んです。私の人生、これでもうおしまいなのかなあって……本当にそう思いましたもんね。」

〔『ベジタ』1993 88〕

高橋は、野菜農家として畑を耕作しながら、子育てと家事をこなし、夫の両親を介護して看取り、さらに孫の面倒を見るなど、長年にわたって一人では多すぎる役割を背負ってきた。亡くなる前、体の不調を訴えていたと他の会員から聞いた。無理をしながら家庭内での多くの役割を果たし続けてきた高橋の死に、「過労死」という言葉が頭をよぎった。高橋の死後、息子は、病院の紹介状が見つかったと話してくれた。近くの医院から大学病院への紹介状である。「自分が入院したら家はどうになってしまうのだろうという責任感が、受診を遅らせてしまったのではないだろうか」〔インタビュー 2003.11.12〕と語ってくれた。

男性に期待される役割は仕事だけなのに対し、女性には仕事も家事も育児も、その上介護まで、多くの役割が期待される。期待されるすべての役割を真面目にこなそうとすれば無理が生じるのは当然のことである。

(8) 家庭での男女共同参画への取り組み

1995年2月、農林水産省構造改善局長、農産園芸局長の連名で出された「家族経営協定の普及推進による家族農業経営の近代化について」という通達で、「家族経営協定⁸⁾」という言葉が使われた。家族経営協定は、単なる労働力とみなされ、人間としての扱いを受けてこなかった農家の女性の人権を取り戻すために重要な役割を果たすものである。農家の女性たちは、昭和30年から40年代になっても、後継ぎを産み、農作業、家事、育児、介護を担い、舅、姑に仕える無給の労働者として扱われていた。給料を決め、休日を決め、女性だけが負担に苦しむことがないよう家事を分担し、家事労働も労働時間に含めるということは、当然のことである。しかし、実際には、60歳から70歳代の男性の理解を得ることが難しく、「家族経営協定の取り組みは女性農業者の理解度は早かったが、男性の経営者や父親からは必要性を問われる」⁹⁾という。家族経営協定を形だけではなく、女性の地位を実質的に向上させるものにできるかどうか、今後、日本の農業が魅力あるものとして生き残っていけるかどうかを決定する鍵になっているのである。

「ひまわり会」の会員たちは、今、後継者問題に直面している。子どもが後を継ぐことになった世帯は、

お茶や花など安定収入が見込める経営が多い。都市化の中でますます経営が難しくなっている酪農や収入が不安定な露地野菜などは、残念ながら後継者がいない。

後継者がいる家庭では、家族経営協定を締結する傾向が出てきている。休みもなく自由になるお金もない生活は、自分たちの代で終わりにしよう、子どもにもその配偶者にも楽しく農業に従事してもらおうという気持ちからである。家族経営協定の内容は、家庭ごとに話し合っ決めていくことになっている。シクラメンなどの鉢物を栽培している沼田富子の家では長男が後を継ぐことになり、2000年3月に、仕事の分担、月給、ボーナス、休日などを決めた家族経営協定を結んだ。息子は今独身だが、結婚したら息子の妻も含めてみんなで話し合い、新しい内容にしていこうと言っている〔『スピカ』2001 2〕。現在、「ひまわり会」の会員17名のうち、7件で家族経営協定を締結している。

苦勞をした人が次の世代に苦勞をさせないという思いが、古い習慣を断ち切っていくことにつながる。このような人たちが増えていけば、ジェンダーによる固定観念が再生産されることもなくなるだろう。農業経営に関する役割分担を明確にしても、男性が家事や介護を分担するようにならない限り、一人で多くの役割を担いすぎて疲れてしまう女性は跡を絶たない。家族経営協定は、育児、家事、介護など女性が担われてきた無償労働を家族全員が分かち合うきざしとして期待される。

(9) 家族や地域の変化

会の結成以来16年間にわたって地域でさまざまな活動の実績を積み重ねてきた結果、「ひまわり会」は家族にも変化をもたらした。家族の変化については、会員の言葉からうかがうことができる。

「初めの頃は、ちょっと遠慮があったけど、もう大丈夫。今ではひまわり会っていうと、いってらっしゃいって送り出してくれるもの。」

〔『ベジタ』1993 88〕

「北海道清里町研修には、泊まりなので、行けるとは思っていませんでした。主人をはじめ、家族の人が行っておいでと言ってくれました。」

〔『ひまわりのように』1998 21〕

1996年8月に実施した北海道清里町への初めての宿泊研修は、会員にとって大変意義深いものとなった。その時の様子は、『ひまわり通信』に掲載されている。



「こんなに早く泊まりの研修ができるなんて、それも北海道まで……」ひまわり会の人々がそう思ったに違いない。飛行機の中での会話、「私、初めて飛行機に乗るの!」「泊まりの旅行に行くのお嫁にきて初めてなの!」とみんなとてもうれしそうな顔。

『ひまわり通信』臨時号①② 1996]

北海道清里町への農業視察研修はプライベートなものではなく、「ひまわり会」は、鶴ヶ島市を代表する農業者団体として参加したのである。このときの交流がきっかけとなり、毎年11月に行われる「鶴ヶ島産業まつり」には清里町の農業者団体が参加、特産品を紹介するといった交流が現在も続いている。

「ひまわり会」が活動を広げ、鶴ヶ島市になくてもならない団体としての地位を築くことにより、家族も「ひまわり会」の一員として活躍する妻の活動を認めるようになっていった。そして、地域社会においても、農業分野だけでなくさまざまな分野の審議会など、政策決定の場に参加し発言の機会を得ていった過程は、すでに述べたとおりである。

「ひまわり会」の歩みは、一人ひとりが農家の嫁という立場に閉じこめられている状態では気づくことさえなかった自分の内に秘められた力を開花させ、仲間と連携して行動に移し、結果として家族や地域を変えていったエンパワメントの過程そのものである。こうした生活に密着した取り組みこそが、家族や地域を、そして社会の仕組みを変えていく確かな原動力になることは、「ひまわり会」の16年の歴史が証明している。

さまざまな活動をととして、自分たちの抱える共通の課題がある程度解決された今、さらに会の活動を社会的な活動につなげていこうとする会員と、ここまででいいとする会員の間に温度差が生まれ、葛藤が生じている。「ひまわり会」には、そうした葛藤を乗り越え、今後も地域において実践に裏づけられた発言を続けるとともに、公的に認められた唯一の農業者の代表機関である農業委員会¹⁰⁾にも進出し、他地域の女性たちと連携しながら、実質的な女性の地位向上につながる活動に取り組んでいくことが期待される。

3. 女性のエンパワメントのための行政の役割

「ひまわり会」誕生の第一歩は、埼玉県飯能農業改良普及所の生活改良普及員が、鶴ヶ島の農業を支えて

いく人、女性の地域リーダーになっていく人の組織化を目指して、戸別訪問を始めたことだった。行政の動きが、家事と育児と農業に明け暮れ地域で孤立していた女性たちをつなげ、エンパワメントのきっかけをつくったのである。筆者が当時勤務していた鶴ヶ島市経済課は、「ひまわり会」の事務局を担当した。地方分権の時代を迎え、市民主体のまちづくりの重要性が盛んに言われるようになってからは、一団体の事務局を行政が担当することを見直す動きがある。市民が自主的に自分たちの会を運営していくことは確かに重要であるが、「普及所の声かけがなかったら、ひまわり会はできなかった」、「市役所が会合の通知を出してくれたから家族の理解を得て出かけられた」、「普及所や市役所とつながっていたから、単なる仲良しグループにならず、社会に目を向けた活動に取り組むことができた」という会員の言葉から、県や市の行政も「ひまわり会」のエンパワメントの一端を担っていたといえることができる。

また、女性センターが「ひまわり会」の活動拠点として、重要な役割を果たしてきたことも忘れることはできない。「ひまわり会」は女性センターでの消費者との出会いを出発点に活動を広げていった。会の歩み[『ひまわりのように』1998 33-44]を見ても、総会や役員会、料理講習会、他市町村の女性農業者団体との交流会など、女性センターがいかに活用されてきたかがわかる。女性センターというスペースがあったこと、しかも、無料で利用できる制度的な枠組みがあったことが、「ひまわり会」のエンパワメントにとって有効であり、そうした行政の支援が活動を継続するのに役立っていたといえる。

花いっぱい運動も、「ひまわり会」の会員一人ひとりの善意に支えられていることはもちろんだが、資金的サポートも多少なりとも役立っていると考えられる。かかる経費のすべてが会からの持ち出しだとしたら、善意もいつかは燃え尽きてしまう。女性のエンパワメントにとっては、それをサポートする行政の制度的な枠組みが必要なのである。

4. おわりに

今後、自治体において男女共同参画を進めていく上で、女性が潜在的に持つ力を引き出していく視点はきわめて重要となる。女性のエンパワメントを推進していくためには、行政が制度的な枠組みを整えていく



こと、女性自らがさまざまな問題に気づき行動していくこと、これらは車の両輪でなければならない。

現在、女性の置かれている立場は多様化し、専業主婦でも年齢や家族構成によって抱える問題は異なるし、働く女性でも雇用形態によって問題はさまざまである。しかし、一人ひとりが、今まで見えなかった自分の問題に気づき、自分の内面にある潜在的な力を発見することで、立場や抱える問題の違いを超えて連帯し、エンパワメントしていくことができるのではないだろうか。そのためには、地域の女性センターのように女性が気軽に集える場を提供し、そうした施設が女性のエンパワメントの拠点としての機能を発揮していくことが行政に求められる役割なのである。

＜注＞

(1) エンパワメント

本稿において、筆者は「エンパワメント」を次のように定義する。自分の内にある力を社会の仕組みの中で見えなくされてきた者が、同じような境遇にある他者との共感をおして自分の内なる力に気づき、自らが持つ能力や個性を発揮し、共感できる他者と連携しながら行動すること。

(2) インタビュー

本稿の執筆にあたり、「ひまわり会」の初代会長を務めた岡野とし子、「ひまわり会」設立当時、埼玉県飯能農業改良普及所生活改良普及員だった毛須英子など、関係者へのインタビューを記録としてまとめた。

(3) 埼玉県飯能農業改良普及所

実際に農家へ出向いて農業技術指導などを行う県の機関。農業行政を行う県の機関、農林事務所と統合し、現在は、埼玉県川越農林振興センター飯能普及部となっている。

(4) 生活改良普及員

いかに農家生活を豊かにしていくか、問題点を見出し解決していく仕事。農業技術指導を行う農業改良普及員と一本化され、現在は、改良普及員となっている。

(5) 鶴ヶ島市働く婦人の家「ハーモニー」

労働省の補助を受けて建設した勤労女性の福利厚生のための施設。時代の流れの中、1998年に鶴ヶ島市女性センター「ハーモニー」と名称を改め、現在に至っている。

(6) 埼玉県農業大学校

農業経営の高度化、社会経済情勢の複雑化に対応できる資質の高い農業後継者の育成を目指し、昭和48年4月、高等学校卒業者を対象とした2年制の学校として設立された。現在、水田経営科、園芸科、畜産科がある。

(7) 農政推進審議会

鶴ヶ島市の農業振興地域整備計画の策定など、地域の農業をどのように振興していくかを審議する機関。

(8) 家族経営協定

家族農業経営の担い手である家族員に平等な経営参画を促し、働きに応じた労働報酬の取得や休日の確保、就業条件の整備を図るために、家族で話し合いを進め、必要なルールづくりを行う取り組み。

(9) 埼玉県農業経営課 専門技術員 大川恵美子がまとめた「家族経営協定締結農家の実態調査結果と今後の進め方」の中で報告されている。(2000年)

(10) 農業委員会

地方自治法の規定により市町村に設置が義務付けられている行政機関で、選挙によって選ばれた農業委員を中心に構成される行政委員会。農業者自らが委員を選ぶ農業委員会は、公的に認められた唯一の農業者の代表機関で、農地の権利調整や農業経営の合理化など農業振興についての対策を進めたり、農業や農業者に関するさまざまな問題、課題についての意見の公表、あるいは諮問に応じた答申をするなど農業や農業者に関する幅広い役割を担っている。農業委員には選挙の他、議会などの選任によって選ばれる委員もいる。2005年6月には、鶴ヶ島市初の女性農業委員が「ひまわり会」から選任された。

＜引用文献＞

大川恵美子 2000 「家族経営協定締結農家の実態調査結果と今後の進め方」埼玉県

鶴ヶ島市 2001 「つるがしま男女共同参画情報紙 スピカ 第4号」

鶴ヶ島市ひまわり会編 1989-2004 『ひまわり通信』創刊号-第45号

鶴ヶ島市ひまわり会結成10周年記念誌編集委員編 1998 『ひまわりのように』

1993 『ベジタ』1993 2月号誠文堂新光社

(なかの・はつみ 埼玉県鶴ヶ島市税務課 主査・城西国際大学大学院人文科学研究科女性学専攻修士課程修了)